

第11回萩原朔太郎賞決まる

四元康祐さんの『噤みの午後』

「第十一回萩原朔太郎賞」は、四元康祐さんの『噤みの午後』に決定。九月六日に東京で行われた選考会で、最終選考に残った五点の作品の中から選ばれました。なお、賞の贈呈式と記念講演は十月二十六日に前橋文学館で行われます。

問い合わせは同館 235 8011へ。



詩集『噤みの午後』(思潮社)

四元康祐さん

最終選考会で

5作品の中から

「第十一回萩原朔太郎賞」の選考委員会が九月六日、東京で行われ、二十二日、前橋文学館で萩原市長が結果を発表しました。朔太郎賞に決定したのは、詩人・四元康祐さんの詩集『噤みの午後』。最終候補作品五点の中から選ばれました。なお、選考委員の皆さん、最終選考に残っていた候補者・作品名・出版社は、次のとおりです。(敬称略)

5人の選考委員

天沢退二郎(詩人・評論家・仏文学者)、清水哲男(詩人)、司修(画家・作家)、富岡多惠子(詩人・作家)、吉増剛造(詩人)。

最終候補者と作品

岩成達也『ひかり...擦過』(書肆山田)、大岡信『旅みやげにしひがし』(集英社)、白石かずこ『浮遊する母、都市』(書肆山田)、友部正人『夜中の鳩』(思潮社)、四元康祐『噤みの午後』(思潮社)。

BLISS

バーバラから自転車を借りて隣町まで遊びに行った
この村からの距離は約六キロ
行きはなだらかな上り坂が続くけれど
その分帰りは気持ちがいいわよ

教えて貰った森の小道を見つけれなくて
急勾配のアスファルトの自動車道を
息切らして上った
教会の塔が見えてきてようやく野の畦道に入った
風に揺れる草のあいだを蛇が波のように這っていた

昼下がりの町はしんとしていた

バス停の横の石段に少女がふたり座りこんで話していた
何軒目かのカフェがやつと開いていて
その裏庭でぼくはただひとりビールを飲んだ
町を出るときも少女たちは同じ姿勢のまま座っていた

泊まっている村に戻って自転車を返しながら
バーバラにどうだったと訊かれて、ぼくは
Oh, it was bliss, it was just bliss!

と答えた。手もとの辞書によれば bliss(名詞)は
無上の(天上の)喜び、至福、天国、天国にいたること

青い空と太陽、雲と風、膚にあたる尖った草の穂
現世的といえはこれほど現世的な飲みもないのに
それが思いがけずあの世へと届く言葉の妙
あの果てしない下り坂を
僕を乗せた自転車が一気に駆け下りたとき

叢のなかにまだ最初の家出をする前の
少年ランボーが蹲っていた
僕は自転車に跨ったまま目をつむって